「オネエ所長の調査ファイル」
♯８

山崎浩治

「オネエ所長の調査ファイル」＃８

１

「あたしね、霊感があるの。子供のころからお墓参りに行くと、墓石の後ろに立っている半透明の人をよく見たものよ」
「所長、怖いこと言わないで下さい！　肝試しやってるんじゃないんですよ！」
「肝試しと言えばさ、オネエにとって一番の肝試しは女装して女子トイレに入ること。平気で入れるようになったらオネエも一人前だわ」
「女子トイレで女装した所長と鉢合わせした人の方が、よっぽど肝試しだと思いますけどね！」
「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が夏の昼下がり、金沢市の野田山墓地を歩いている。市山はボブのカツラにサングラスを乗せ、白のトップスにトロピカル柄のショートパンツという夏のリゾート地に似合いそうなスタイルで〝女〟に変身していた。東京で看護師をしている洋子(52歳)から「お盆に先祖供養をしたいので、曾祖父母のお墓を探してほしい」と依頼を受け、墓探しの真っ最中なのだ。
　洋子の父方の祖父は戦前、両親を残して金沢を離れ、以来、東京で商売を営む。現在、都内の霊園にある墓は祖父の代からのもので、洋子の父親が建てたものだった。その父親も10年ほど前に亡くなって、金沢に残された曾祖父母の墓のありかを知る人はいまや誰もいないのだという。
「依頼人が知る手がかりは曾祖父母の名前と、宗派が浄土真宗だったということだけ。これで一体どうやって探すんですか」
　墓石で埋め尽くされた野田山墓地の斜面を見上げた透が途方に暮れたようにつぶやく。「暑い暑い」と顔の前で手をあおぎながら、市山が答えた。
「野田山墓地にあるお墓は数万基といわれてる。朽ち果てたお墓まで加えると正確な数はとても分からないわ。一つずつ確認していったら、お目当てのお墓を見つける前に、あたしたちが先にお墓に入ってしまいそうね」
「のんきなこと言わないで下さい、所長！」
「それじゃ、プランＢで行きましょうか」
「プランＢの内容とは？」
「金沢市内にある浄土真宗のお寺に片っ端から当たるのよ」

２

　墓探しは難航した。個人情報保護を理由に埋葬者の名前の開示を拒む住職がいたり、親切に過去帳を調べてくれるものの、やたら時間がかかったり、そもそも墓石が苔に覆われて名前が読めなかったりと、調査は一向に進捗しなかった。うだるような暑さの中、市山と透が墓探しを続けている。女装する気力を失い、〝女〟を捨てた市山は半ズボンにタンクトップというオヤジ丸出しファッション。垂れ落ちる汗をタオルで拭った透が言った。

「こうして寺まわりをしていると、荒れ果てた無縁墓が多いことを実感しますね、所長」
「さっき訪ねたお寺の住職さんは、お墓の３分の１が無縁墓になってると言ってたわ」
「それも無理ないですよ。オレなんて、もう何年も墓参り行ってないですもん。以前、ヒットした歌にあったでしょ？　私はお墓に眠っていません、って。お墓に亡くなった人がいないなら、墓参りする必要ないですもんね」
「あのねトオルちゃん、人って２度死ぬのよ」
「何ですか、それは」
「１度目は肉体的な死、そして２度目は記憶からの死。生きている人が故人のことを忘れない限り、その人は誰かの心の中で生き続けることができるの。お墓参りすれば、故人のことを思い出すことができるでしょう？　お墓参りは故人を忘れないために行っているものなのよ」
　その時、七五調の心地よい和讃の響きが聞こえてきた。二人の前に古い土塀に囲まれた寺があり、本堂の脇に小さな墓地が見えた。歌声のような美しい調べに導かれるように墓地に入っていくと、墓石の前で法衣を着た女性僧侶が数珠を片手に和讃を唱えていた。剃髪はしておらず、ショートヘアを束ねている。浮き世離れしたその美貌に、透が思わず息をのんだ。
　市山から事情を聞いた女性僧侶がタブレット端末を取り出し、データベースで故人の名前を検索すると、この寺の墓地に目当ての墓があることが判明した。

３

　人並みに何度か恋愛し、結婚しようと思ったこともあったけれど、どの男もいまひとつピンと来ず、ためらっているうちに未婚のまま月日が流れて40歳を過ぎてしまった。東京都内にマンションを購入したのは40代半ばのことである。
　そのころ、たまに実家に帰ると、居間にいる母が背中を丸めて誰かと話をしていることがあった。誰かと言っても、そこには誰もいない。案外、天国にいる父と話をしていたのかもしれない。
　認知症の進んだ母はほどなく徘徊を始め、しばしば警察に保護されるようになる。古い家に一人にしておけない、と介護施設に入居させた。名義変更してあった祖父の代からの家と土地を売却した金でマンションのローンを完済したのは、それからしばらく後のことである。母が自宅に帰ることはもうないだろう、という判断だった。
　しかし、母を送り込んだ介護施設の費用が想像以上にかさみ、あまり長生きされると自分の老後の備えが危うくなる、と内心ヒヤヒヤするようになったあたりから、洋子自身、体調を崩すことが増えていく。職場では50代を迎えて症状の重い患者を任せられることが多くなり、責任が重くのしかかったことも不調の要因だっただろう。
　気分の波が激しくなり、勤務を終えて、マンションの部屋に一人でいると不安でたまらなくなった。看護師になってから30年以上、一人暮らしを続けてきた。これからさらに何十年も一人で食事をし、一人でテレビを見て毎日を過ごすと思うと、叫び出したくなるような孤独を感じたのだ。身寄りは介護施設にいる認知症の母だけ。私生活で親しく付き合う友人もいない。病気で

突然死すれば、何日も発見されない可能性が高かった。
　急に怖くなって、勤務している病院ではなく、別の病院で検査を受けると「更年期障害」の診断で片付けられた。「病気ではないから我慢しろ」と突き放されたみたいだった。悩んだ末に、フリーペーパーの広告で見た占い師に相談に赴く。
「あなたの先祖に成仏できていない人がいて、体調不良の原因となっている。先祖の供養をしなさい」
　その言葉ですべてがストンと腑に落ちた。家の墓で眠っているのは父方の祖父母と父だけである。曾祖父母の墓は祖父母の故郷である金沢にあると聞いたことがあったが、洋子はもちろん、父母も金沢に墓参りしたことはないはずだ。そもそも父の墓参りだって、もう何年も行っていない。先祖を粗末にした結果、災いが起きていたのだと洋子は確信した。

４

「曾祖父母のお墓には雑草が生い茂っていて、見るからに無縁墓状態でした。こんなにほったらかしにしていたら、ご先祖様が怒るのも仕方ありませんね。昨日一日かけて草を刈り、お墓をピカピカに磨き上げましたよ。今度、東京の知人に頼んで祈祷してもらうつもりです。費用はちょっと高くつきますが、ご先祖のためと思って奮発します」
　市山から墓の場所を聞いた洋子がお盆に金沢を訪れ、墓参りした後、「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスにやってきた。嬉しそうに報告する洋子に、市山が尋ねた。
「念のために聞くけどあなた、霊感商法なんかにハマッていないでしょうね？」
　洋子がスイッチを切られたように動きを止めた。
「誰かに話すと、運気が逃げる、とでも言われた？」
「‥‥」
「人は誰でも非科学的な迷信に弱いものよ。あたしだって雑誌の占いや血液型による性格判断に日々、惑わされながら生きてる。でもね、『あなたの先祖の霊がたたっている』なんて話は信じない。そんなこと言われたら、『子孫にたたる先祖はけしからん。そんなやつは、あたしの先祖ではない！』と答えるわ」
「ある占い師から、先祖供養をおろそかにしていたから不幸になった、と言われたんです。先祖の霊を浄化するためにはお寺の僧侶ではなく、その人の祈願が必要だ、と」
「それで、その祈願料が何十万円？　それとも水晶でも買うの？」
　洋子がこくりとうなずいた。
「先祖供養はお金じゃない。敬う気持ちが一番大切なの。それはあなた自身、よく分かっているはずよ」
「‥‥はい」
「東京にも金沢にもお墓がある。これから毎年、あなたは多忙な看護師の仕事をしながら両方のお墓参りをするつもり？」

　洋子は結局、維持・管理の難しくなった曾祖父母の墓を〝墓じまい〟し、都内にある父と祖父母の墓に〝改葬〟した。いわば墓の〝引っ越し〟をしたのである。
「金沢プライベート・リサーチ」に届いた手紙によると、洋子は彼岸にも墓参りをするようになり、毎朝、仏壇に炊きたてのご飯をお供えしているという。さらに週に一度は介護施設にいる母親を訪ね、一週間にあった出来事を話しているそうだ。認知症の母親は他人行儀に頭を下げるばかりで理解している様子はないが、以前のような孤独を感じることはなくなった、と手紙に綴られていた。いかがわしい占い師ときっぱり縁を切ったのは言うまでもない。市山と透がオフィスで今回の調査を振り返っている。
「少子高齢社会を迎え、誰もがお墓について考えざるを得ない時代か来てるわ。今回の依頼人のように、遠方にお墓があるという人も少なくない。無縁墓にしないためにも、いまの居住地にお墓の引っ越しをさせるケースが増えていくかもしれないわね」
　１年後のお盆のころ、市山と透が依頼人の曾祖父母の墓があった寺に赴く。データベースを使って埋葬者を調べてくれた女性僧侶に礼を言うためだった。市山はちりめんの浴衣姿で、手には団扇と巾着袋を下げて女装している。
「トオルちゃん、この浴衣の柄、何の花だか分かる？」
「さっぱり分かりませんね」
「花柳界では夏に萩をあしらった衣装を着ると、妊娠するという迷信があるそうよ。あたしも妊娠しないかなあ」
「所長も迷信、信じてるんですね」
「心は乙女だもの。ねぇ、あたしってお花に似てると思わない？　お花には〝おしべ〟と〝めしべ〟の両方あるでしょ。ふふふ、お花のように美しいあ・た・し」
「はいはい、なんとでも言ってなさい」
　寺を訪れた二人は意外な事実を知る。くだんの寺は長年にわたって住職のいない空き寺だったのである。当然、墓地の埋葬者をデータベースで管理しているはずもなかった。ぽかんとした顔の透が市山に聞いた。
「それじゃ、タブレット端末を使ってた、あのべっぴんの女性僧侶は誰だったんです？」
　あごに人差し指を当て、しばらく考え込んだ市山が口を開いた。
「観音様は三十三の姿に変身して人々の声を聞き、救うといわれてる」
「ま、まさか、あの女性僧侶は‥‥」
「観音様は救うべき対象に応じて、男にも女にもなるわ。まるであたしみたいにね。あたしってもしかすると、観音様の‥‥」
「それ以上言ったらバチがあたりますよ！」
　市山がいたずらを叱られた子供のように、小さく舌を出した。